

「悪霊を追い出す」

ルカの福音書 8:26～39

はじめに

今日の箇所は、「霊的戦い」などと呼ばれる、悪霊を縛り、また追い出すことを教える箇所として度々用いられています。今日でも神社仏閣などの宗教施設や、犯罪や性的墮落の顕著な場所に出て行ってイエスの御名でそのような祈りをする人々がいます。私も以前はそのようなことをしていた時期がありましたが、いつも大きな疑問を抱いていました。それは、追い出された悪霊はまた別の場所で悪事をするだけではないか、そして追い出してもまた戻って来るかもしれない、ではいつも悪霊の動向に目を向けていなければならないことになる、この不毛な追いかっことを続けることが本当に自分のすべきことなのだろうか。私たち教会に与えられている働きとは本当にそのような、悪霊を求めてこれを追い回すことなのでしょうか。またそもそも悪霊とは、その働きとはどのようなものなのでしょうか。その答えを求めつつ、ヘブル語の視点、神のご計画の視点をもって今日の箇所から読み解いてまいりたいと思います。

1. ゲラサ人

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:26 こうして彼らは、舟で、ガリラヤの反対側にあるゲラサ人の地に着いた。

前回、荒れ狂う風と波を鎮められたイエシュアとその一行は対岸の「ゲラサ人」の地に到着しました。なぜイエシュアはここに来られたのでしょうか。その理由がこの「ゲラサ人」という存在に秘められています。新改訳聖書にはこの名の注釈があり「ゲルゲサ人」とも呼ばれるとありますが、これはヘブル語で表記すると旧約聖書では「ギルガシ人(גִּרְגָּשִׁי)」と訳される存在を指し示すこととなります。この民族はカナンの地の先住民族の一つで、主はかつてイスラエルにこのように語られました。

申命記【新改訳 2017】

7:1 あなたが入って行って所有しようとしている地に、あなたの神、主があなたを導き入れるとき、主は、あなたよりも数多くまた強い七つの異邦の民、すなわち、ヒッタイト人、ギルガシ人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、およびエブス人をあなたの前から追い払われる。

7:2 あなたの神、主が彼らをあなたに渡し、あなたがこれを討つとき、あなたは彼らを必ず聖絶しなければならない。彼らと何の契約も結んではならない。また、彼らにあわれみを示してはならない。

このように、「ギルガシ人」とはイスラエルの前から「追い払われる」「聖絶」されるべき「七つの異邦の民」の一つでした。しかしその後の申命記 20:17 の御言葉を見てください。

申命記【新改訳 2017】

20:16 あなたの神、主が相続地として与えようとしておられる次の民の町々では、息のある者を一人も生かしておいてはならない。

20:17 すなわち、ヒッタイト人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人は、あなたの神、主が命じられたとおりに必ず聖絶しなければならない。

このように「七つの異邦の民」という呼称とともに「ギルガシ人」の名前が聖絶の対象から削除されているのです。この民は一体どうなったのでしょうか。

その秘密が彼らの名にあります。「寄留者、在留異国人」という意味のゲール(גַּל)と「群れ、群衆」という意味のレゲシュ(צִבּוּר)が組み合わさった名、ゲール、レゲシュがこの「ギルガシ」というわけなのです。イスラエルの民に寄留する者、すなわちイスラエルの神を自分の神とし、イスラエルの民につながるうとする異邦人の群れに対して、主はこのように命じておられます。

レビ記【新改訳 2017】

19:33 あなたがたの国、あなたのところに寄留者が滞在しているなら、その人を虐げてはならない。

19:34 あなたがたとともにいる寄留者は、あなたがたにとって、自分たちの国で生まれた一人のようにしなければならない。あなたはその人を自分自身のように愛さなければならない。あなたがたも、かつてエジプトの地では寄留の民だったからである。わたしはあなたがたの神、主である。

民数記【新改訳 2017】

15:15 一つの集会として、掟はあなたがたにも、寄留している者にも同一であり、代々にわたる永遠の掟である。主の前には、あなたがたも寄留者も同じである。

15:16 あなたがたにも、あなたがたのところに寄留している者にも、同一のおしえ、同一のさばきが適用されなければならない。」

カナンの先住民、すなわち異邦人であった「ギルガシ人」でしたが、彼らはイスラエルの中のゲール・レゲシュ「寄留の民」となることで聖絶を免れたのです。そればかりか彼らはイスラエルの民の奴隷ではなく、主の御前にイスラエルと同等の立場を得たのです。そのような存在と、イスラエルの神、主の御心、ご計画が今日に箇所に登場している「ゲルゲサ人」「ゲラサ人」には指し示されているのです。

イエシュアがこの地に行かれたことは偶然でも気まぐれでもなく、また異邦人ならば誰でも良かったものではありません。「ギルガシ人」についての聖書の記述、主の御心を指し示す「ゲルゲサ人」「ゲラサ人」でなければならなかったのです。そもそも「イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには遣わされていません。(マタイ 15:24)」と言われた御方が、異邦人の地であるこのゲルゲサに、呼ばれもしないのにわざわざ行かれたこと自体不思議なことなのですが、これこそがイエシュアが「寄留の民」をも愛されるイスラエルの神、主であることの証と言えるのです。ですからここでの出来事にはイスラエルの寄留者、イスラエルにつながる異邦人、イスラエルの神、主だけを自分の神とする異邦人、すなわち私たち教会に

対するイスラエルの神であられる主のご計画が表されているということです。ではそのような視点をもって読み解いてまいりましょう。

2. 悪霊につかれた男

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:27 イエスが陸に上がられると、その町の者で、悪霊につかれている男がイエスを迎えた。彼は長い間、服を身に着けず、家に住まないで墓場に住んでいた。

8:28 彼はイエスを見ると叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。「いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。お願いします。私を苦しめないでください。」

8:29 それは、イエスが汚れた霊に、この人から出て行くように命じられたからであった。汚れた霊はこの人を何回も捕らえていた。それで彼は鎖と足かせでつながれて監視されていたが、それらを断ち切っては、悪霊によって荒野に駆り立てられていた。

このゲラサ人すなわちギルガシ人の「悪霊につかれている男」とは、かつての、いや実際には今現在の私たち異邦人の教会の姿、状況、状態を表した「型」です。そう聞くと「え、私は悪霊にとりつかれてないけど?」と思われるかもしれませんが、「悪霊」を意味するヘブル語シェード(טִשְׁ)とは本来、イスラエルの主以外の神、神々すなわち「偶像」を意味する言葉なのです。

申命記【新改訳 2017】

32:15 エシュルンは肥え太ったとき、足で蹴った。あなたは肥え太り、頑丈でつややかになり、自分を造った神を捨て、自分の救いの岩を軽んじた。

32:16 彼らは異なる神々で主のねたみを引き起こし、忌み嫌うべきもので、主の怒りを燃えさせた。

32:17 彼らは、神ではない悪霊どもにいけにえを献げた。彼らの知らなかった神々に、近ごろ出て来た新しい神々、先祖が恐れもしなかった神々に。

このように、「悪霊」とは本来、初めは存在しなかった「近ごろ出て来た新しい神々」のことであり、さらにはその新しい教え、新しい情報に従わせることを指すのです。この「新しい神々」、またその教えとは何でしょう。それは「エシュルン」とも呼ばれるイスラエルの、その「先祖が恐れもしなかった」つまりイスラエルの父祖たちが「知らなかった」聞かされていない教え、情報のすべてです。それは逆説的に言うならばアブラハム、イサク、ヤコブの神が彼らとその子孫であるイスラエルに知らされた約束、ご計画すなわち

創世記【新改訳 2017】

28:13 そして、見よ、主がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

というこの主の約束に結びつかない、このご計画に反する、逸脱するすべての教え、考え、すなわちイスラエルに対する敵意全般を指す言葉、存在、それがこの「悪霊」の正体、本質です。さらに言うならばこのイスラエルに対する神のご計画を否定せずとも、これを気にも留めず、軽視、無視、無関心であり、自分や人のことばかりに、神のご計画以外のことに目を向けることもまた同様です。どうですか？それでもまだあなたは「悪霊」につかわれていないと言い切れますか？そして今この事実を聞いて、これからはいつても神のご計画のことだけを思いながら生きる生き方ができますか？しようと思えますか？できないでしょう、思えないでしょう。なぜですか？今述べた「悪霊」につかわれている、その支配下にあるからです。

私たちは残念ながら、今はまだ「悪霊」の支配下、影響下にあるのです。この「悪霊につかわれている男」が「何回も捕らえていた」とあるように、自分や人の力や頑張りではこの「悪霊」の支配から完全に逃れることはできません。はっきり言いますが、聖書を学び、祈りや賛美、礼拝をささげることによっても、その解放は一時的、いやほんの一瞬です。最初に述べたように、悪霊を追い出すことだけに重点を置く働きもまた、自分が悪霊を追い出しているように見えてもその実、悪霊に引き寄せられて重要な事実から引き離されているのです。これではまったくサタンの思うつぼです。

ではどうすれば良いのでしょうか。どうすれば私たちはこの「悪霊」の支配から完全に解き放たれるのでしょうか。それはこの「悪霊につかわれている男がイエスを迎えた」ように、「いと高き神の子イエスよ」とイエシュアの御名を呼び求め、この御方によって救い出されることを願い求めることです。そしてこの男のように、「服を身に着けず、家に住まない」者ではなく、服を着せられる者、家に住まう者とされることです。この「服」ベゲド(בגד)は本来、ただの服ではなく花嫁衣裳、ウェディングドレスを意味する言葉です(創世記 24:53)。そして「家」バイト(בית)は本来、大洪水による地上の滅びを免れたノアの家族が入った箱舟の中(創世記 6:14)を意味する言葉です。これらの意味はイエシュアが弟子たちに約束された以下の御言葉に結びつきます。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

私たちが花婿イエシュアの花嫁としてこの「父の家」に迎えられること、それが私たち教会に与えられた唯一の「悪霊」の支配からの解放です。そしてそれは世の終わりの大患難という滅びを免れ、救われることと同義です。この救い、この解放はイエシュアの空中再臨、携挙によって成就します。ですからそれまではこの「悪霊」の支配が続きますので忍耐しましょう。

そしてこの男はイエシュアに会うまで「鎖と足かせでつながれて監視されていたが、それらを断ち切つては、悪霊によって荒野に駆り立てられていた」ともありますが、これは 400 年にもわたるエジプトの

奴隷生活と、40年間荒野を旅したイスラエルを指し示しています。つまりこのゲラサ人の男はやはりイスラエルとともに生きる、イスラエルの寄留の民としての異邦人の「型」であり、私たち教会の「型」であるということです。

3. レギオン

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:30 イエスが「おまえの名は何か」とお尋ねになると、彼は「レギオンです」と答えた。悪霊が大勢彼に入っていたからである。

8:31 悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行けと自分たちにお命じにならないようにと懇願した。

「レギオン」この名はローマの軍隊（歩兵五千～六千、騎兵百二十）を指すギリシャ語です。ヘブル語を話すユダヤ人の王メシアであるイエシュアに対して、悪霊はひれ伏しながらもギリシャ語で軍隊、イスラエルに敵対する言葉で答えたのです。これは「悪霊」という存在がいかに反ユダヤ、反イスラエ尔的思考を持っているかということの表れです。なぜなら名前はそのものの全存在を表すからです。

そしてここで注意して見ていただきたいことは、イエシュアは悪霊自身に「レギオンです」と答えさせ、イエシュアご自身はその名を呼んではおられないということです。神である主にとって名を呼ぶことはそのものの選びと招きを意味する行為だからです。このように、イエシュアは悪霊自らにイスラエルに敵対する者として名乗らせ、その意向を表明、宣言させ、そしてイエシュアはその名を呼ばないという行為をもってこれを退けられたのです。このように、悪魔であるサタンの配下にある悪霊は、イエシュアにひれ伏しながらも反イスラエ尔的なその考え、その働きを改めることはありません。彼らは永遠にイスラエルの敵、イスラエルの神、主の敵なのです。そしてここで悪霊どもが言っている「底知れぬ所」とは以下のような場所です。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

20:1 また私は、御使いが底知れぬ所の鍵と大きな鎖を手にして、天から下って来るのを見た。

20:2 彼は、竜、すなわち、悪魔でありサタンである古い蛇を捕らえて、これを千年の間縛り、

20:3 千年が終わるまで、これ以上諸国の民を惑わすことのないように、底知れぬ所に投げ込んで鍵をかけ、その上に封印をした。その後、竜はしばらくの間、解き放たれることになる。

20:9 彼らは地の広いところに行き、聖徒たちの陣営と、愛された都を包囲した。すると天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。

20:10 彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。

このように「底知れぬ所」とはイエシュアが地上再臨され、悪魔であるサタンと悪霊どもを捕らえて縛り、投げ込んで千年の間封印する場所です。メシアであるイエシュアの建てられる王国が「千年王国」とも呼ばれるのはこの所以です。悪霊どもはどうかしてこの計画を阻もうとしてイエシュアの憐れみを乞うか

のように「懇願」さえしていますが、聖書に記された神のご計画は絶対です。覆ることはもちろんのこと、実行が先延ばしになることもありません。

4. 豚に心中（笑）

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:32 ちょうど、そのあたりの山に、たくさんの豚の群れが飼われていたので、悪霊どもは、その豚に入ることを許してくださいと懇願した。イエスはそれを許された。

8:33 悪霊どもはその人から出て、豚に入った。すると豚の群れは崖を下って湖へなだれ込み、おぼれて死んだ。

「豚」ハジール(חזיר)はまさに悪霊、反イスラエルの象徴的存在です。ギリシャの最高神ゼウスに捧げられるいけにえが豚でした。モーセを通して与えられた律法においてこの豚についての言及は以下のものです。

レビ記【新改訳 2017】

11:7 豚。これはひづめが分かれています、完全に割れてはいるが、反芻しないので、あなたがたには汚れたものである。

律法におけるきよい動物の規定は、①蹄が分かれていること、②反芻（一度飲み下した食物を口の中に戻し、かみなおして再び飲み込むこと）すること、の二点です。豚は蹄については規定を満たしています。つまり外見はきよく見えるのですが内臓つまり見えない部分においては反しているのです。これは羊の皮をかぶった狼（マタイ 7:15）とも言い換えられる偽預言者、まさにサタンの手下である悪霊の象徴です。先ほどの「底知れぬ所」の後に待ち受けている「火と硫黄の池」にはサタンも悪霊も偽預言者も獣もこれに従った者たちもすべて投げ込まれます。ここで悪霊も豚ももろともに「崖を下って湖へなだれ込み、おぼれて死んだ」様はまさにその事実を、神のご計画を表しています。そして彼らはみなその苦しみの中で永遠に自らの行いを恥じ入る、まさにハジールことになるのです。

5. 非常な恐れ

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:34 飼っていた人たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や里でこのことを伝えた。

8:35 人々は、起こったことを見ようと出て来た。そしてイエスのところに来て、イエスの足もとに、悪霊の去った男が服を着て、正気に返って座っているのを見た。それで恐ろしくなった。

8:36 見ていた人たちは、悪霊につかれていた人がどのように救われたか、人々に知らせた。

8:37 ゲラサ周辺の人々はみな、イエスに、自分たちのところから出て行ってほしいと願った。非常な恐れに取りつかれていたからであった。それで、イエスが舟に乗って帰ろうとされると、

8:38 悪霊が去ったその人は、お供をしたいとしきりに願った。しかし、イエスはこう言って彼を帰された。

8:39 「あなたの家に帰って、神があなたにしてくださったことをすべて、話して聞かせなさい。」それで彼は立ち去って、イエスが自分にしてくださったことをすべて、町中に言い広めた。

神のご計画とは、神を信じる者にとっては喜びの訪れ、福音ですが、そのすべての成就を実際に目の当たりにする時、私たちは今度は悪霊ではなく、神である主に対する「非常な恐れに取りつかれ」ことになるでしょう。その事実がこの豚を飼っていた人がぶったまげた、悪霊につかれた人が正気になったシヨッキングな出来事を見た人々に表されています。しかし「[ゲラサ周辺の人々はみな](#)」イエシュアにひれ伏すことも、受け入れることもせず、逆に「[自分たちのところから出て行ってほしいと願った](#)」のです。つまり彼らはイエシュアを拒絶し、これを否定したのです。そこでイエシュアはこの悪霊につかれていたが正気に戻った男を福音を宣べ伝える者として残され、遣わされました。ここにもやはり私たち教会の「型」と今日におけるその役割、働きが示されています。

最初に述べたように、今日の箇所から悪霊を追い出すための方法や祈りを説く教会もありますが、イエシュアがこのゲラサ人の男に命じられたことは「神があなたにしてくださったことをすべて、話して聞かせ」ること、すなわち神の御業、神のご計画を「[話して聞かせ](#)」ことです。悪霊を追い出すことでも、奇蹟を行うことでもありません。ただ一人、悪霊を追い出し、底知れぬ所に、火と硫黄の池に投げ込むことがおできになる方、メシアであるイエシュアのことを宣べ伝えることなのです。

悪霊を追い出すことや奇蹟を行うことでは、たとえ実際にそれが行えたとしても、人はそれを見てただ恐れるだけで福音を信じません。それをイエシュアご自身がここで証明されました。イエシュアが悪霊を追い出し、癒しや数々の奇蹟を行われたという事実に、その記述にどのような意味が、どのような神のご計画が秘められているのかということを知ること、解き明かすこと、そして宣べ伝えること、この福音の奥義、神の国の奥義を宣べ伝え、それを聞いて信じる者のために今私たち教会に担わされている役割を、今日も覚えましょう。どうかイスラエルの神、主を選ばれている、その憐れみを受ける、主を信じる信仰が与えられる人のもとに、福音が届けられますように。